

---

# 彼女の見ていた夢

雪野道化

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

彼女の見ていた夢

### 【Nコード】

N0394I

### 【作者名】

雪野道化

### 【あらすじ】

二年前の「彼女」とのデートの後、「彼女」が口にしたもうひとつの夢とは何だったのだろうか。街中の電気屋で見かけた「彼女」の姿を見て、俺は「彼女」とデートしていた時の事を思い出す。

黄昏時の街中、俺はなんとなく電気屋の前で立ち止まってショーウィンドウ越しに店の中に飾ってあるテレビを見てみた。

ちょうど、彼女がステージの上で歌いながら踊っていた。

その表情は明るくて、とても以前泣き虫だった彼女と同一人物とは思えなかった。

今ではトップアイドルだ。

移り変わるスポットライトの光にあたりながら、彼女は何のミスもなく完璧に振り付けをこなしながら、その女神なまほろ歌声を響かせる。カメラが時折客席に切り替わる。

ペンライトを振りながら多くのファンが彼女に声援を送っている映像が映っている。

彼女が手を振るとよりいっそう盛り上がる。

☆☆☆☆

「ほらー、早くー走るー」

草原の上を嬉しそうに走りながら俺の方を振りかえる。

無理もない、これが彼女にとって初めてのデートだからだ。

「そんなに急がなくても誰も追ってこないぞ？」

半分からかいながらそう言うと、彼女は頬をふくらませながら反論する。

「時間が追いかけてくるの！！」

やれやれ、お嬢様に付き合うこっちの気持ちにもなってもらいたいものだ。

俺は仕方なく歩くペースを上げて、彼女のもとに来た。

「何？ 私とじゃ不満なの？」

腰に手をあてて俺を見上げる。

彼女は身長が俺よりも三十センチも低い。

「いいえ、あなた様にお付き合いただき光栄の至りでございます」

「ふん！ 最初からそういう態度でいればいいのよ。…で、ほら、あそこが今人気があるらしいわよ」

そう言っただけで彼女が指差した先を見ると――水族館。

「ねえ？ ちょっと長くない？」

さすがに雑誌でもテレビでも紹介されているデートスポットならば長い列が出来るのは当然だろう。

彼女は唇をとがらせながら、「こんなに待つのか…」と呟く。

「だから、急いでも同じだって言ったじゃないか」

俺がそう言っていると、彼女の鋭いボディブローが飛んできた。

あまりの痛さに膝をつく。

「何とかしなさいよ…め、召使いなんだからあ…」

おいおい、こんな人が多いところで何て事を言うんだ。

しかも、彼女は今にも泣きだしそうだ。

周りのイタイ視線が俺に集まるのを自覚しながら、俺は服の内ポケットから2枚チケットを取り出して、彼女の前に差し出す。

「ほら、優待券を持ってるから大丈夫だ。これがあればどんなに長い列でも潜り抜けられる」

ここでバイトをしている友人に無理を言っただけで手に入れてもらった物だ。

通常の入館料の3倍払ってわざわざ手に入れたのは彼女の喜ぶ姿を想像してなのだが、

「な、なんだあ。…それならさっさと出しなさいよ！」

結局怒られてしまった。

「わあ〜！ おっきいカニね〜。このガラス壊されないのかしら？」  
そう言っただけで興味深そうに水槽の中を見る彼女。

さすがに怖いのかさっきの魚のようにガラスに張り付いて見るこ

とはしない。

怖いのは分かるが俺の服の裾を引っ張るのはやめてくれ。

「どうだろうな？　もし、壊れたら襲われるのは美冬ちゃんが最初だろうな？」

そう言って笑い始めた俺に、彼女のボディーブローが再び飛んでくる。

ぐはっ！　いい、息が…。

うずくまって苦しそうに呼吸する俺を見て彼女が『しまった、やり過ぎた』と言う表情を浮かべているのが横目で見える。

二十秒ほど全く呼吸が出来なかった…。この手のジョークは命の危機にさらされる…。笑いながらだと特に。

「あ、ほら立って！　あっちでアシカのショーがやってるみたい」  
今の出来事をごまかすように彼女はそう言った。

ちよっと待て、そこは別料金じゃなかったか？

そう声をかける間もなく俺を置いて彼女は走り去っていく。

「あー、面白かったあー」

満面の笑みを浮かべながら彼女が言う。

「豪快に水しぶきを浴びせられたな…」

一方の俺は彼女の身代わりとなり服がびしょびしょだ。

何でこんな目に…。

「さて、と。今度はどこに行く？」

俺の眩きをスルーして彼女は俺の方を振り返る。

今日の朝起きた状態では俺の体力ゲージは満タンだったはず、しかしすでに残りが300分の1を切っている…気がする。

「もう帰らないか？」

一瞬、深い悲しみの色が彼女の瞳を覆う。しかし、次の瞬間には元に戻っていた。

「ええー、まだ見てないところがいっぱいあるじゃない。まだまだこれからよ」

そう言って笑いながら俺の腕を掴み歩き出した。というか、俺をひきずるように歩き出した…。

水族館の中をあちこち回ってその度に「キャー」とか「うわーっ」とかリアクションをしている。そんな彼女の様子を見ながら今日連れてきて良かったなあ〜と思い、思わず頬が緩む。

彼女に見られたら殴られるのでその度に慌てて引き締め直す。

最後に彼女は売店でイルカの入ったストラップを買った。俺が他の品物を見ている間に彼女はコソコソと他にも何かを買ったようだったが、友達へのお土産だろうと思い深く追求しないことにした。バッグの中に隠して俺には見えないようにしている。

彼女の家の近くまで送ると、彼女は突然「公園に寄りたい」と言い出した。

俺はボディীবローをくらうのが嫌だったので、仕方なく付き合う事にして彼女の家から二百メートルほど離れた場所にある公園に付き合った。

「懐かしいなあ…。小さい頃は毎日来てたのに最近は何しくて全然来れなかったし」

そう呟くと、彼女はブランコを立ちこぎを始めた。

俺は彼女の正面のベンチに座り、嬉しそうにブランコに乗っている彼女をじっと見つめる。

彼女は丈の短いスカートを穿いているのでパンツ丸見えだ。

だが、その事に彼女は気付かずにブラブラと揺すっている。

やがて飽きたのか「疲れたー」と言いながら俺の隣に腰をおろす。

「元気だなあ、お兄さんはもう疲れてクタクタだよ」

「そう、いい事じゃない」

彼女は笑いながらそう答えて、やがて俯く。

そして、沈黙が訪れた。

何か話題を振った方がいいのか？　そう考え始めた時に彼女が先に口を開いた。

「：私ね、受かっちゃった」

「えっ！ そうなのか？ 良かったじゃないか」

俺はそう言っただけに彼女に笑いかける。それでこそ、俺が彼女の元に  
来た意味があるというものだ。しかし、彼女は深刻な面持ちで首を  
振ると俺に顔を向けた。

「ううん、違うの。：事務所のオーディションに」

俺は一瞬何を言われたのか分からなかった。

それぐらい突然のカミングアウトだったし、もとよりいつか彼女  
が口に出した『夢』の事なんてすっかり忘れていたからだった。

「事務所：のオーディション：？」

「うん：。だから、ホントは途中から家庭教師なんて必要なかった  
のよ」

寂しそうな笑いを浮かべながら再び俯く彼女。

「：そっか。おめでどう」

ポツリと呟いた言葉がひどく事務的なものだった事に俺自身が一  
番驚いていた。

「ありがと：」

彼女も一言、そう返した。

そして、溜め息をつくと彼女をからかおうと口を開いた：が、彼  
女に遮られてしまった。

「あー、もうこれで勉強しなくてすむんだわー。召使いと一緒にの部  
屋に長時間いるなんてもうまっぴらよ。予習しろー、復習が大事だ  
ーってもう言われずにすむと思うと肩の荷がおりた気分よ」

一気に捲し立てながら彼女は立ちあがって伸びをした。

おいおい：。苦笑しながら『それはないんじゃないか？』って言  
おうとした俺の目に彼女の瞳から涙がポロツと落ちたのが見えた。

「あー、あくびしたら涙が出ちゃったわ。あつ、そうだ！ これあ  
げる」

そう言っただけの中から先程俺に隠れて買った物を取り出す。  
明らかにあくびで出るような涙の量じゃないだろ、そう思ってい

たが彼女が『あくび』と言っている以上は、あくびという事にして  
おいた。

差し出された物をよく見るとペアのリングだった。

どちらにも、いるかを模した彫金がされていて、尾びれの部分と  
頭が繋がっている。

箱を開けて片方を取り出すと、取り出した物よりも一回り小さい、  
もう片方のリングを彼女が奪い取った。

「指の大きさ合ってるよね？ 合わないなら合う指につけてね」

無茶を言う。だが、俺は指が細い事を自慢にしていたりするので、  
入らない事はない。

彼女を見ると左手の薬指につけている。

俺も彼女に倣って左手につけようとしたが、彼女がすかさず右手  
の薬指につけてと言う。

右手の薬指につけたら、彼女が俺の手を取り自分のリングと俺の  
リングを合せた。

「よし！ これでもう私から逃げられ……」

そこで彼女は言葉を切って、とうにか堰を切ったように泣き始め  
た。

「……ないんだからあ……」

泣き声に重ねながら喋っているのではっきりとは聞こえなかった  
が、そう言ったのは雰囲気で分かる。

俺は立ち上がり彼女をゆっくりと抱きしめた。

すると、彼女は大声をあげてさらに泣き続ける。

しばらくそうすると、彼女がゆっくりと俺を突き放して恥ずかし  
そうに唇をかみしめてベンチの方を向く。

「やだなあ、私ったら……恥ずかしい」

そう言ってクスクスと笑い、俺と目を合わせる。

どんな顔をしたらいいか困っている俺に彼女は言葉を続ける。

「じゃあ、これでおしまいです。今までお世話になりました、せん  
せっ！！」



頭を一瞬だけ下げると彼女は微笑みながら再び目を合わせる。

「あ、ああ…。こちらこそ――」

俺も苦笑しながら頭を下げようと顔を下に向けた瞬間に、彼女の唇が重ねられる。

それは一瞬の出来事だったが、彼女は唇を離すと何でも無かったかのように俺と距離を置き、「じゃあ、もう行くね」と手を振りながら走りだす。

俺も帰るかなと考えていた時に、彼女が再び戻ってきた。

「言い忘れた。私ね、新しい夢見つけちゃった。だから五年だけ待っててね…。それじゃ」

そう言って、彼女は今度は振り返ることなく走り去った。

それが彼女の生の声を聞いた最後の瞬間だった。

☆☆☆☆

あれから二年経ち、彼女は厳しいレッスンの末に憧れていたトップアイドルまで登りつめた。

今では彼女のステージと聞くとどここの場所でも満席近くなる。

俺は彼女のステージは一度も見に行かなかったが、たまにテレビをつけると彼女が元気な様子で映っているので頑張っているんだなあと感じていた。

テレビには彼女のステージと切り替わり…。追悼の歌。

三日前にわき見運転の車と接触し、彼女は亡くなった。

俺がそれを知ったのは昨日だった。

入っていたバイトのシフトをずらして貰って、昨日、彼女の家を訪れたものの人が一杯でその場にずっと留まる事が出来ずに、焼香だけして家に帰った。

二年前に彼女が言った、『五年だけ待ってて』という言葉。一体何がしたかったのだろうか？

五年経ったらアイドルを引退する…という意味だったのだろうか？  
彼女がずっと見続けていた夢は、これからも三年の間続くはずだ  
った夢は叶う事なく終わりを告げた。

俺は電気屋のショーウィンドウの前から静かに立ち去った。

(f i n)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0394i/>

---

彼女の見ていた夢

2010年10月8日15時49分発行